不動の「信念」の動揺

近藤良樹

１．確信の不確かさ－信念の「信」－

（**「信念」は、日本的なもの**）「信じる」ことは多岐にわたり、その特殊な信じ方に応じて各言語は固有の言葉を幾つももっている。われわれも、信用・信頼・信仰・自信･迷信等多くの信をもつ。同じ人間のことであるから、各言語間の共通性もかなりあり、信仰といえば faith, belief、信用といえば trust や credit となる。だが、差異も相当なもので、われわれの「信念」は、何と英訳すればよいのであろう。faith（信仰）, belief（信仰）, presumption（推察）, conviction（確信）, will（意志）, principle（原理）等が和英辞典を引くと並んでいるが、どれをとっても「信念」とは相当ずれている感じになる。自然科学の「原子」なら、atom 一つでよい。だが、人の生き様にかかわる言葉は、その生き様が民族によって異なるので、他言語におきかえると相当のずれを生じる。信念も、そういう日本人固有の「信じる」あり方を色濃く映じているようである。

しかも、「信念」は、古くは、信心・信仰の意味に使われていたようで、現代的な、つまり、自分の行動の指針・原理として受け入れた考えを間違いないものと見なして、これを貫いていくといった意味での使用は、辞典に引用された文例等からみると、どうも最近（明治以降）になってのことのように推察される。出る杭は打たれるわが国の没個人主義のなかで、これに受け入れられるかたちで「信念をもって」生きる個人が、近代日本に求められたのではないか。共同体的世界において世々代々同じ事を反復し、付和雷同する状態にとどまっていたのでは、近代を切り開いていくことはできなかった。個の能力を生かし、筋を通し、確信をもって先駆していく信念のひとが必要となった。自己を全体から穏やかに切り離す「信念のひと」がこの国の近代に求められる人物像の一典型となってきた。それが今日の意味での「信念」ということばを作り出したのではないかと想像する。以下、われわれの「信念」というものの基本を考えて見たいと思う。

（**信は、一般に懐疑可能**）ところで、信念のその「信」は、確かなものであり、「確信」である。信念のドイツ語訳はというと、まずは Ueberzeugung があげられるが、これは、確信という意味を第一とする。われわれの「信念」も、「まちがいない、確実だ」と堅く信じるものであろう。

だが、原理的には、「信」は、知りえず疑わしさの残る不確かなものを信じるのである。知ってしまって、不確かさ・疑わしさがなくなり「確か」となったら、「信」は、なくなってしまう。「あすは、雨だ」という予報を信じるが、それは、そのことが知りえず、不定で疑いを残す限りでのことである。あすになったら、雨であっても、あるいは予想に反して晴れても、もう信じることはない。本当と「知り」、うそと「知る」のみである。直接には知ることができず、懐疑可能であるかぎりで、ひとは信じるのである。いかなる「信」も

不確かで、懐疑可能なのである。

（**確信も不確か**）信念では、確信している。「不確かだが、よくは分からないが、まずは、信じよう」などという自信のない、あいまいな信ではなく、確かであり、間違いないと確信している。「不確かな信念」など形容矛盾である。コロンブスは「大西洋の向こうのインドへ」との「信念」をもって、冒険の航海を行なった。大西洋のはては、滝になっていて奈落の底に落下するという俗説を拒否して、地球は丸く、西まわりでインドにいけると確信していた。ひょっとしたら滝になっているかもとは思わなかった。その信念は、確信であり、疑いの余地をはさむものではなかった（とわれわれは伝え聞くが、コロンブスの本心は彼のみが知るところである）。

ついていった船員たちは、はじめは信じていたとしても、日とともにその信にひそむ懐疑心が大きくなっていった。インドなどへはいかず、滝になっているかもと、不信状態に陥った者もあったろう。だが、コロンブスは、地球は丸いという古代ギリシアからの学説を確信して、前進した。しかし、確信であろうとも、信であるかぎり、懐疑をはさめる。コロンブスも、西回りでインドに行ったことはなかったのである。かれもまた、一瞬こころの片すみで「あるいは、滝になっているのかも」との疑念をもつことがあったかも知れない。そう推察することが、「信」にとどまるかぎりは可能である。信念をいだく者自身は、確実で疑いなど微塵も存在しないと思い確信しているとしても、信念の確信もまた、信であるかぎり、間違いなく、不確かなのである。

（**信念は信であるか**）ところで、「不確かな信念」が形容矛盾にひびくとすると、信念は、「信」ではないのであろうか。それは、不退転の決意であり、「信念をもってやっている」とは、堅い意志、執念であって、信じるということではないと言われるかもしれない。だが、信念をもってするその信念の対象・その内容の真偽は、コロンブスの場合でも、不可知にとどまっていることであって、それへの懐疑を停止して真実にちがいないと、信じて受け入れ、これに賭けたのである。あるいは、トロイの遺跡を信念をもって発掘したハインリヒ・シュリーマンにしても、「トロイ戦役は、真実あったことだ」とホメロスを信じて、真実であることを実証しようと発掘を試みたのである。単なる執念ではなく、真実に間違いないと、信じていたのである。直接には知りえていないものを前提にして、そのことについての特定の情報をふまえ、これを真実として受け入れるという信じる知性のあり方を、信念でも取っている。信念は、やはり、信であり、確信なのである。

（**信用は不信と一体だが**）信念の場合も、信であるかぎり、その信においては、不確かさ懐疑可能性を常に残しているのであるが、その主観的な自覚において、懐疑心は微塵もいだくことはない。その懐疑されうるものは、一体どこにあるのであろうか。

「信用」の場合は、その信のすぐ背後に懐疑を見せる。不信をひめている。何度もうそをついて金をせびる親戚の者から、「こんどこそは、心を入れかえてやる、資金をもう一回だけ貸してくれ」といわれて、「今度は信用できそうだ」と信じる場合、「やっぱり裏切られるかも」との不信をもつのが普通である。信用は、損得の社会生活に言われるもので、

しばしば不信と裏腹である。信用と不信が自身のうちで葛藤状態になっていることが少なくない。

しかし、信念の場合は、そういう内的な葛藤は皆無である。確信しつつ、不信をいだくといった葛藤はありえない。信念をもってやっている人は、確信ひとつである。しかし、その確信も信であるかぎり、疑いを残しているはずである。その真実と思っている信は、虚偽の可能性をもつ。信念のひとは、その疑いを少しももたないのだが、実は、その不確定・懐疑可能性は、信念のひとの外に存在する。信用では、その信用するひと自身が不信をいだき内的に葛藤するのだが、信念では、その不信は、自身いだくことがないかわりに、そのそとに周囲の者において持たれる。コロンブスは、信念をいだいたが、庶民の多くは、おそらく信じていなかった。地球は丸い、西回りにインドへいけるということは、疑わしく不信の目で見られていた。シュリーマンのトロイ遺跡の発掘は、その信念は、常識人には受け入れられることはなく、多くの者は無視・白眼視した。

信用は内的葛藤になるが、信念の確信では、「外的葛藤」、対立になるのである。信念は、全員が受け入れるものにはならない。「これは、私の信念だ」という。一部の者がこれを真実だと信じてうけいれるのである。かりに全員が受け入れるとすると、もはや「信念」とは言わなくなる。地動説は、天動説との対立の時代には、信念であった。ガリレオは、そういう信念のひとで、地動説の信念を曲げなかった。だが、今日、みんなが地動説をうけいれて信じる時代になると、もはやこれは、信念とはいわない。信念は、そとにこれに反対する者をもち、確信を否定する懐疑可能性をそとに残しているのである。

（なぜ、確信するのか）信念は、信であるかぎり確かさを欠き、疑わしさをどこまでも残したものである。だが、確信する。なぜ、確かと思うのであろうか。信は、一般的に「確か」と信じる。「１５日に本は返す」との友人の約束を信じる者は、それを「真実にまちがいない」と信じるのであって、「その可能性が高い」と信じるのではない。本当は、「可能性が高い」状態にとどまり、１５日になっても返さない可能性は残っており、懐疑可能で不確かである。この懐疑可能な状態において、その懐疑を停止して、「まちがいない」とするのが信である。真実の可能性にとどまるものを必然性にと、いわば行き過ぎた様相に捉えなおして信じる。信じる場合、懐疑を停止するので、「疑わしさ」の意識がなくなり、そのことで「確か」「明白」と感じることになるのであろう。信念は、信一般のこの必然性様相への捉えなおしを顕著にもち確信する。信用は、信じて「まちがいない」と思いつつも、裏で「だまされる可能性もある」と懐疑可能性を想起することがある。これに対して信念では、確信して、裏での「本当は懐疑可能性が残っている」という思いを完璧に停止・破棄して、裏表なしに全面的に「まちがいない」と信じる。

そうなるのは、ひとつには、懐疑可能なものは、自分の向かいに、そとに立てられることがあろう。向かいの、自説を否定するものは、まちがっており、自分のが真実だというのであるから、意識状態としては、自説は、絶対的と感じられやすい。「間違い」は、そとの対立した説であり、それでは「ない」のが自説である。あるいは、対立する者からは自

説が「まちがい」と非難されるのだが、これをそうでは「ない」と拒否・否定して、「まちがい-ない」と、二重否定において懐疑・否定を自覚的に払拭して確信することになる。信念では、信用のように信一般の懐疑停止は一部に留まる（不信を裏面に残す）のではなく、自己においては、これしかないと確信して、それに生きるというのであり、全面的な懐疑停止となる。信念を批判する外部の者は、疑わしく否定的なものを指摘するが、信念をとる者は、その肯定的なものに注目する。信念によって得られるもの、バラ色の未来は、信念をもつ者のみが描く世界である。想像はどうしても抽象的になり、否定的なもの・障害等はあまり描かれず、それが現実化すると幻滅するものも、非現実にとどまれば気にはならない。この未来に自分を賭けて、自らがその実現にひたすらなのであれば、否定的な懐疑的態度は一層とりがたくもなる。確信するゆえんである。

現実と夢、想像は、しっかりと区別されるのがふつうだが、特殊な意識状態では、これが混同される。かつては夢と現実はいまほど異なった世界とはみなされなかった。今でも、不吉な夢をみたものは、それが現実へ影響する度合いを大きく見積もってしまう。精神的に異常状態になって、現実と想像・解釈が混乱すると、被害妄想がそうであるように、自覚としては、被害等の想像・妄想が現実的なものと実感され確かと感じられてしまう。確信も、精神状態いかんでは、その実感の度合いが相当に異なってくる。信念をもつ者は、そのことに賭けており、自分の心身はその信念の実現に一歩踏み出しているのであって、この実在の心身の同じ延長上にあるバラ色の世界に酔ってもいるとすると、その確信の度合いは、周囲からは想像できないぐらい大きいものとなることがあるのであろう。

２．他を排し、それに生きる－信念の「念」に込められたもの－

（自らの行動の指針とし、与してこそ信念）確信と信念は、異なる。確信するだけでは、信念にはならない。「邪馬台国は九州にあった」ということを確信していたとしても、それだけでは、信念とはいえない。確信自体は単なる知にとどまる。これが信念になるには、その確信するものに自己を賭けて、これを自らの生き方とし、行動の指針として、主体的に参与することがなくてはならない。その確信内容に与して、実践的な理性、意志がそれに関わっていく必要がある。邪馬台国九州説に与して、これを擁護し、自らの生き方として、その説の真実であることを検証し、畿内説と論戦を交えるといった実践に踏み出してはじめて、信念のひとである。

信念は、信じることであり、英語で faith とか belief に訳されるが、同時に、principle とも訳される。原理・原則である。「信念をもって生きる」という。その信念内容は、そのひとの生き方となり、その行動の指針となるものである。それに従って自らを処する原理・原則、あるいは実践の目的として描かれる理想や規範、そういう「信じる念」観念・理念が、「信念」であり、そして、これに生き「信じ念じる」のが、「信念」である。「これは私の信念です」という場合、単に確信しているというのではなく、その信念内容をなす原理・原則は自分を導くもので、それを自らの行動の指針・原理とし、これに生きるといってい

るのである。

兵役を拒否するときとか、肉食をしないとき、「宗教的な信念」を理由としてあげることがある。その信念は、その宗教的な確信において成立しているのだが、信仰といわずに、信念というのは、それが当人の社会的な行動・態度についての原理・指針であるからであろう。兵役拒否の信念は、その宗教的原理から自分の選択する厳しい個人的な原則・指針であり、単にそれが正しいと確信しているのみではない。周囲の批判中傷のなかで、これに耐えて、それに生きるのである。

（**意志の問題**）「信」は、知りえないものを知ろうとする知だとすると、信念の「念」は、その信の確信を主体的に生きようとする実践的な思いであり、意志・意欲であるといえようか。その信の確信するものを、自身の行動の指針とし、原理・原則として採用して、これを意志していくのである。兵役拒否が正しいことだと確信していても、それをわが身に実行するのでなくては、信念とはならない。自分が、その兵役に関与できない外国人で、そのことについては、なんらの社会的な実践もできないとか、歴史上の話で、どこかの中世の市民についてのことだったとすると、いくら兵役拒否が「正しい」「正しかった」と確信しても、ひとごとでは、それは信念とはならないであろう。信念は、自身が主体的にこれに生き、その確信を意志して行動の原理・原則として実践する姿勢がなくてはならない。

この主体的な姿勢は、その信念の確信自体にも影響を及ぼす。単に確信しているのみでは、ひとごととして、真剣さに劣り無責任になりやすい。「兵役拒否は正しい」と確信するだけなら、社会的非難や逮捕・拷問といったものを考えることもなく、簡単にできる。だが、それを信念にして、実行することになると、この非難や拷問を覚悟してのものになり、よほどしっかりした確信であることが必要となる。ひとの単なる確信は、あまりあてにできないが、信念にしているとなれば、これは確かである。

信には、リスクに「賭ける」という契機がある。信じる場合、それが真実かどうかは不可知にとどまり懐疑可能性が残るのだが、信じる者は、この懐疑の停止を決断して、真実とみなして受け入れることへと「賭ける」。信にはつねにリスクがともなう。どんなに確かと思っても、だまされる可能性が残る。「虚偽」のリスクが不可避であり、これに賭ける必要がある。信念では、しばしば、周囲のものは冷ややかに、「うそだ」「あやしい」と拒否している。リスクは、普通の信に比して大きく、それが信念をいだくものにも、よく見えている。その大きなはっきりしているリスクを背負い、これに自分を賭けることへと決意し、意志を固めるのが、信念とするということである。コロンブスは、「大西洋をわたるとインドへ行ける」という信念をもったが、そのリスクは、周囲が、おそらくは乗組員さえもが語り、意識されないではおかなかった。生命にかかわるその大きなリスクを背負う決意、堅い意志を、その信念ではしっかりともつことになったはずである。

（**「念」は、希求である**）信じる場合、その約束等の未来の結果について、疑わしさ・不確かさは残りつづけるのだが、「まちがいない」と確信して予期し予定している。よいことであれ悪いことであれ、その通りが確実に結果すると見通す「expectation（予期・期待）」を

もつ。一か八かで賭けているのではない。まちがいなく信じているようになると思い込み、確実視し、確信しているのである。

信念をもつものは、この確かさの予期、確実視としての「期待」を普通の信以上にもっている。信じて成り行きを眺めているのみではなく、自身がそのことに関わり主体的にその展開を信じているようにもっていこうとし、それの真実であることを検証し、実現していこうとする。間違いないと思うだけではなく、自身がこれを行動の指針とし、主体的にそれに与して、それに賭けのめりこむのである。そとからの批判に対して、これを論駁し、味方しようという姿勢をとる。信念の実現を強く希求し「念」じるのである。

同じように地球は丸いと確信していた者でも、それを信念としてコロンブスのように大西洋を西に航海することにまで進んだものは、少数である。確信を信念にまでする者は、その個人のごく特殊なものによっているというべきところがある。それが信念の「念」に込められている。それは、情念的なものでもあろう。その信念となるものに、尋常ならざる憧れをもち、これを強く欲求し希求するひたすらな「念」である。

（**執念としての信念の「念」**）われわれの「信念」という言葉は、その「念」においてこの信の特性を語ることになるが、確信するにとどまらず、信念とまでなるのは、それに主体的に参与しこれに与する姿勢をもつことにおいてである。その「念」は、単なる「理念」や「観念」にとどまるものではなく、信念においては、主体的に関与して自己の信を貫いていくこととして、「一念」「執念」といわれるようなものになるのであろう。どこまでも、おのれの思い・信を貫く心意気をしめす。信念は、「信じ念じる」である。

「信念の人」は、障害を乗り越え孤立をものともせず、自己の信を貫き通していく人である。単に一時的にその生き方に与するというのではない。それをどこまでも自らの行動の指針とし原則とする強い意志をもつ。その信の「一念」を貫き、「執念」を燃やす。ひとが、自説を曲げず、なにがあろうともどこまでもこれを貫くとき、「あれは、かれの信念だから、仕方がない、放置しておく以外手がない」と、その頑固さに閉口して諦めるようなことがある。信念は、どこまでも貫徹するもので、悪くいえば「執念深さ」をもつ。信念に相当する英語・フランス語の conviction とか、ドイツ語の Ueberzeugung では、十二分に（con, Ueber）説得的ということで、貫徹力が想像されそうであるが、われわれは、「念」においてこれを示す。

（**排他的な個人性・党派性**）信念は、その信念とする原理・原則の真実にかかわって実践的なものであるが、その実践は、真実を実現したり検証することであるとともに、対立的な党派との戦い、排斥的実践でもある。後者の意識が信念には不可欠である。

信念は、全員がもつものではない。一部の者がもつのである。そうなるのは、第一に、信じるものとして、それは懐疑可能であり、疑ってそれを受け入れない者が当然そとに残ることがある。さらに第二には、信じるとしても、不信を残した者もおり、これも信念の確信のそとにいて批判勢力となりうる。そして第三に、かりに確信したとしても、これを自らの生き方としこれに与して主体的に実践していくには決断のいることがある。確信か

ら実践的な信念にと飛躍するには、これに反対する者、無関心な者との戦いをも辞さないという決意が必要となる。そして、第四に、何といっても、行動の指針（原理・原則）は多様に可能であって、信念のひとは、そのうちの一つを選択しているにすぎないということがある。自己の確信する原理・原則は、同一のことについての他の人に確信される別の諸原理・諸原則をしばしばそとに有していて、これらと相容れず対立的となる。信念の実践は、真実の実現や検証の実践であるとともに、しばしばこの対立的な個人や党派との抗争になる。

全員が一つの信念を一致して受け入れることも当然ある。地動説は、天動説をいまや消滅させて独占的な学説となっている。だが、戦う相手をなくした勝者は、もはや戦うことも勝者であることもできない。地動説は、いまは、もう信念ではない。全体がひとつの信念を占めたときには、そこでは、各個人がおのれの生き方として受け入れに必死の決意をし、味方し、堅持していこうという執念などもつことは不要となる。確信ではあっても、信念ではなくなるのである。それがなお信念と言われるとしたら、これには別の全体があって、それが、自分達の全体の定説をうけいれず、それと戦いを続けなくてはならないという場合であろう。ここでも信念は、受け入れない相手、戦う相手をもっていての信念である。

信念は、戦う相手を持つ。そういうものとして、相互に承認しあっている。お互いに対立する信念をいだく者同士や信念に無関心的な周囲とは、相互が「信念」ということでの了解をもつ。無関心な周囲は、その信念を「尋常ではない、狂気に近い」と思いつつも、「盲信」「頑迷」等とせず「信念」として承認するのであり、ひとつの理性的で実践的な信の可能性として尊重しつつ、自身は与しないと冷ややかなのである。信念をとる方も、周囲が無理解なのは、自身の信念がいかにも特殊でみんなが参加できるものではないと承知して、周囲に無理強いはしないつもりである。同時に、孤高を保っているのだと、内心では誇っているのでもある。対立しあう党派的な信念同士の場合も、各々を尊重する姿勢はもち、相手にも合理性のあることを相互に承認しあう。かつ、その信念内容については、相容れず、自分たちが真理の党派であり、相手は虚偽に囚われた党派と相互に思い、真実が一つの場合は、どちらかが倒れるまで戦わねばならないことを了解しあうのでもある。

（**孤高の意識**）信念の内容は、これをいだくものには、確信できることであり、正しい、まちがいないことである。しかし、その真実にちがいないものを他者は否定的にあつかう。信念をもつ者は、真実を知る自分こそは、これに生き、これをしっかりと主体的に擁護しなくてはならないと思うことになる。自分は、先駆者であり、その信念内容のために尽くしていかねばと、その生き方に自らの使命感をいだくことになる。

信念は、しばしば、ほかのひとは無視するようなものであり、孤立をもたらすことになる。その孤立に対して、当人は、確信をもっているから、まちがっているのは、おろかしいのは周囲だと思う。周囲のおろかしいものに対して自分は、高貴な使命を与えられていると思い、自身の孤立は、先駆者のそれとして誇りとし、いわゆる noblesse oblige(高貴な

者の義務)を意識する。

信念は、自身にとっての下賤な部類の好みについてはいわない。自分の信念は、つねに高貴である。高い善である。「泥棒家業をもって生きることを、信念にする」とはふつうにはいえない。それを高貴な使命と感じうる者にのみいえることで、「ねずみ小僧」「怪盗ルパン」などでないと、これを信念とすることはできないのではないか。「玄米食を信念にする」という場合も、単なる「習慣」ではないものとしては、なんらかの事情でそれが自身には誇らしいものとなっているのであろう。

３．堅い信念を貫いて－コロンブスの悲喜劇－

（**堅い守り**）「堅い信念」という。信念は、内的に確固として固まっていて、そとからの批判攻撃に対して、しっかりと維持防衛される。信念のひとは、確信をいだき、自身の理性において合理的な根拠づけをもち、個人的にこれに生き参与することを決意してその感性的なささえも十全である。

コロンブスは、「西まわりにインドに行ける」と確信し、これを信念とした。周囲の無視・批判に立ち向かい、決してひるむことなくその確信を堅持した。航海に出ても、大海原のみで乗組員がインド行きに不信をいだきはじめるなか、断固として、その信念を守りつづけて、船首を西に向けさせつづけた。その信念が弱かったとすると、かれも、日に日に不安となって自信を失い、信を折って船首を来た方向に変えさせたかもしれない。信念は、その成立のはじめから、自己のそとに自身を無視したり対立するものをもつ。攻撃され非難されることをはじめから前提している。それに立ち向かえるだけの強く堅い意志をもっていて始めて信念となりうる。頑固の気味がなくもない。ただし、頑固は、没理性的盲目的に自己閉鎖し、聞く耳をもたないのだが、信念の堅さは、理性的な根拠・裏づけをもっての確信であり、意志の強固さであって、ここには外部の愚かしい声など入り込む余地がないのである。

（**どこまでも貫く実行力**）「信念を貫く」という。どこまでも信念は自己を貫徹して、必要なかぎりこれを持続していく。無原則、無節操になりやすい中で、一つの行動の規範を自己の生き方として、その一貫性を保つというのが信念の人である。信念は、「念」をもつ。一念であり執念である。妨害を断固撥ね退けて、その不変の意志を貫く。目的を達成するところまで、これを貫徹していく。

コロンブスは、有言不実行の評論家たちを前に、卵をたてて見せたという。信念は、実行をもとめる。机上の空論を戦わせるよりは、確信したものに不退転の決意で取り組み、これを実行・実現していく。インドに西回りに航海できると聞いて納得してそれを確かと信じているのみでは、なお信念にはならない。その実践に踏み出す必要がある。その確信するものに生き、参与していくのである。実行力がなくては、確信どまりとなる。コロンブスは、そう確信するだけで海に乗り出すことをしない多くを尻目に、それを実証する行動にでた。そして、その確信＝信念を、困難が繰り返し押し寄せてくるなかで、最後まで

貫徹したのである。

確信は、「深まる」。根拠付けを明確にし、信じるに足るものを一層深く解明することで、確信は、深まっていく。しかし、信念は、「深まる」とはいわない。信念は、「堅い」信念や、「強い」信念となって、実行力を高め、「貫く」ことが肝心だというのであろう。

迷いを生じるようでは、信念とはいえない。狐疑逡巡・懐疑を停止して、確信したものを不変的に維持し実行していく必要がある。コロンブスは、信じて共に乗り出した船員たちですら迷いだし、不信に陥り始めるなかで、そのはじめの確信を変えず貫き通した。トロイ戦役を真実だと信じこんだ若いシュリーマンは、遺跡発掘の思いを実現するために、営々と資金を貯めて、発掘に生涯をかけた（という話であるが、子供のときの「トロイ」の夢が、いつ信念になったのか、定かではない）。おそらく、ふつうの者は、途中で、その思いを断念したことであろう。だが、かれは、迷うことなく信念をもちつづけてこれを貫徹したのである。

（**揺らがない、自信**）自信は、自分を信じる、自分を頼もしいと自己評価する。そして、それによって、迷いを払拭し確信し、自分はできるのだ、優秀なのだと誇らしく思いつつ、湧いてくる勇気ややる気に鼓舞されながら、ことを進めていく。自分の頼もしさは、自己の有する能力・実力にある。それが、誇れるものであると自己において判断され、そして、それの発揮について、まちがいなくことを成就できる、信じてよいと自身の実行力も確信している。自身の能力に頼ってよい、信じてまちがいないと誇らしく思っているのが、自信をもっている状態であろう。信念のひとは、その信念内容を確信し、自身の与するその生き方に誇りをもち、自信をもって、おのれを貫徹していく。

自己について「できるのだ」「優秀なのだ」とみなす自信は、自尊の気持ちをもち、自身の充実した存在感をともなう。自信をもてないものは、「引っ込み思案」となるが、その反対であり、実力があると自己を認識していて、「ことはなる、戦えば勝つ」と考えているので、その実力を出す機会があれば、まよわず実行に踏み出そうとする。「自信満々」というが、能力があると自身を信頼しており、実行への意欲は旺盛である。実行に際して、実力があるのだから、自らを信じ頼りにして、まようことはなく、ものおじすることなく、勇敢にたちむかうことができる。信念のひとは、確信をいだき、周囲の無関心・反対に対して、その信念とする原理・原則に生きる自己を高く評価して、それは凡人にはとれず、これに生きることはむずかしいものとして、孤高を当然とし独行するひとである。自信があればこそできることである。

信念のひとは、自信過剰な面をもつ。そとの者がまちがっており、自分のみが正しいとの確信をいだいている。自説をまげるつもりはない。自分は、真実のひとであり、懐疑されるべきは、否定的に見られるべきものは、そとにある。それは、自分を無視したり非難している側にある。信念のひとのこのかたくななまでの自信過剰がその信念の実行を持続させるのではある。信念のひとは、周囲との協調を大切にし情的な交わりをそこなわないように配慮するひとではなく、理性のひとであり、意志のひとである。状況に適応して自

分を合わせていくのではなく、状況を切り開き、自身の抱いた確信を貫くことを大切にするひとである。反復される攻撃等の困難に耐えて、躊躇することなく進んでいってはじめて、信念は成就される。コロンブスは、自信過剰でかたくなであったからこそ、アメリカへと到達できたのである。

（**くじけない一貫性**）信念のひとは、くじけない。自己貫徹力が大きい。それは、もともと、そういう気骨をもったものがいだくものだからということと、確信したその原理・原則の卓越さ、そしてこれに取り組む当人の使命感等があってのことであろう。われわれは、えてして無原則的で無節操にその場しのぎに過ごしていきやすい民族である。それは、臨機応変・融通無碍ではあるが、長期的展望を欠いており頼りないこととなる。状況の変動のなかで無原則なものは、右往左往する。だが、信念をもつ原則のひとは、その普遍の原則のもと、不動であり、一貫性をもつ。信念のひとは、「筋を通す」ひとである。

かりに、ひとを魅了する理想があってこれを確信するとしても、そのひとが、優柔不断で無気力だとすると、信念は形成されないであろう。確信できるものを我事としてこれを自身に引き受け参与する主体的な堅く強い意志がなくてはならない。はじめから困難があるのが信念であり、気骨、気概をもって、困難に耐えるいわゆる「根性」がなくては、信念は貫徹できない。信念の念は、「執念」である。「一念天に通ず」「一念、岩をも通す」というが、その一念は、これを実現するまで持続して、信念を貫徹していく。

信念がまがらず挫かれず貫かれるのは、その確信内容つまりそれに生きるその原理や理想自体によることでもある。ユートピアに自身を賭けて、その信念を貫くとき、困難に耐えさせるものは、そのかがやかしいバラ色の未来であろう。それは、魅了し我を忘れさせる。困難に耐えることで、そのバラ色のユートピアが手に入るのだとすれば、困難は、困難であるより、理想実現のための確かなあかしとなる。その困難に耐えることは理想実現への確実な一歩となる。

（**宣言し、固められる信念**）信念は、口にされるときは、会話し譲り合うような対話ではなく、しばしば一方的に宣言されるもの、断言になる。「これは、私の信念です！」というのは、問答無用の意志表示である。信念は言表されて「確言」になると、変えることは困難となる。一旦、宣言して見えを切ったら、これを変更することはできない。こころのうちにあるものとちがって、そとに表わしたものは、自分から独立して、当人の意志とは無関係に一人歩きして飛び回る。このことでは、さらに、周囲から、そういう信念のひとととレッテルをはられることで、ますます不動となるようにとしむけられる。「邪馬台国九州説のひと」とのレッテルが貼られたら、内心では畿内説との間で動揺していても、それを捨てて、九州説に自身を固めることに向く。九州説で一貫するようにとしむけられてしまう。

信念は、自分がいだくものであり、ひとから、周囲から強制されるものではないが、一般に、ひとから一定の価値付け、レッテル張りをされると、そうでなくても、そういうものになりやすい。ましてや、その信念を自らに宣言して確定し、それをもって、そのように周囲からも評価されることになると、その信念は、なにがあっても変えるわけにはいか

なくなる。一貫した信念のひとができあがる。

（**現実とのずれが大きくなる**）信念は、貫徹される。それは、誤っていても同様であり、その場合は、優柔不断の方が被害はすくなくて済む。信念を貫いたからこそ、コロンブスは、アメリカ大陸を発見できたのではある。信念は、過っていても、ときには思いがけない贈り物をする。だが、誤る可能性を残す信念は、ときに深刻な事態を結果する。早い目に確信を撤回して実践を停止しておれば問題はないのに、信念のひとは、これを貫徹していく。コロンブスは、アメリカ大陸がたまたま近くにあって、しかも南北に長々と伸びていたからよかったものの、中米地域が陥没していて大西洋が太平洋と直結していたら、インド亜大陸に着くまえに太平洋の大海原のどこかで難破して海のもくずとなりはてていた可能性が高い。

ユートピアは、ひとを引きつける。共産主義の信念は、ひとをこの百年ひきつけその実現へと動かした。だが、その悲惨は甚大なものとなった。コロンブスとちがって、人々を奈落の底に突き落としていった。早い目に引き返せば、あるいは「粛清」等で何千万もの尊い犠牲者をだすことはなしに済ませられたかもしれない。信念は、主観的な確信であり、あくまでも、誤りうる信に属している。真実であると確信しているのであるが、そうでない可能性が常に残っている。信念は、偉大なことを成就するが、同時に、それに憑依する悪魔の仕業ともなることがある。

４．「信念」は、高評価語

（**信念の価値づけ**）信念は、行動の指針となる原理・原則について、これを間違いない確かなことと見なしてうけいれ、これにしたがって生き、これに与していくことであろうが、この、確信し自身それに生きることは、通常、よいことと評価される。「信念」は、悪い意味では使われない。同じように、懐疑可能なものを信じるのであるが、「盲信」は、あるべきではない否定的な信とみなされ、「信用」も、ときには、「うかつに信用したのが間違いだ」と否定的に評価されることがある。その点、「信念」は、その結果が自他に否定的なものをもたらすことは少なくないが、この信をいだくこと自体は、肯定的なことと評価される。

われわれの言葉では、「信念をもっている」とか「情熱を注ぐ」というと、悪い意味ではありえず、常にそれは、よい心がまえと理解される。だが、信念や情熱へのこの肯定的な評価は、日本語圏内での評価である。「情熱」に対応する英語やフランス語の passion やドイツ語の Leidenschaft は、悪い意味でも使われる。Angeln ist seine Leidenschaft とは、「釣りが彼の病みつきになった」ということである。Ueberzeugung (信念＝確信)も、ドイツでは、かならずしも、よい意味には限定されないようである。Sie ist von sich selber ueberzeugt とは、「彼女は、うぬぼれ屋だ」という意味である。否定的に評価しているのである。Ueberzeugungs-verbrechen とは、「確信犯」である。これも、その「確信」は、よい意味ではないであろう。

われわれ日本語の「信念」とか「情熱」は、第一に、それをいだく当人自身によって、良い心がまえと評価されるものになる。信念をもつことは、自身に誇れる態度になるとの自己評価である。情熱も同様であろう。自身で悪いと思うものには、「情熱」は向けない。かつ、第二に、それをそとから見て、「あれは、かれの信念だ」とか「かれの情熱には負ける」と表現する場合も、その信念、情熱は、肯定的に高評価語として使用されているのである。「これは、A君の信念だ」というとき、発言者は、「A君自身それを誇らしく思っている」と理解しているのであり、かつ発言者自身もそのA君の信念を肯定的に評価しているのである。仮に、そのいう「A君の信念」を否定的に軽蔑していう場合は、信念といわず、「盲信」とか「かたくなな思い込み」ということであろう。情熱も同様である。もし、その情熱を否定的にみなすのであれば、情熱とはいわず、「欲情」とか「病気」等という。

（**「信念」と「信頼」の対人的視野の違い**）ところで、悪人が信念をもち情熱をもっている場合、それは、周囲には、一層の悪い結果をもたらすことになりかねない。信念・情熱をもつ者は、かならずしも周囲のことを視野にはいれていない（利他的な信念がないというのではなく、なくても信念でありうるということである）。だが、親切とか誠実は、自身のみでは成立せず、自らが他者のことを思い、その他者からみて好ましいであろうこと、よりましなことを企てようと、親切になり誠実になるのである。利他的な意識が根本にある。したがって、悪人のすることであっても、その親切や誠実は、その関わる他者にとって好ましいこととなる。

信では、信頼が、こういう、他者を配慮した利他的な契機を含んだ信になるのではないか。信頼するのは、相手を、信じるに足りる頼もしい立派な人間だと評価しているのであり、あるいは、自己を低くして謙譲の姿勢をとっているのである。相手にとっては、好ましいありがたい態度となる。信用・信頼いずれも、裏切られることがある。その場合、信用では、「信用した者が悪い」というが、信頼では、「信頼したのが悪い」とはいわないで、「裏切った者が悪い」ということになる。信頼は、悪くはなれない。

これに対しては、「では、詐欺師を信頼するのもいいことなのか」といわれるかもしれない。そういう相手には、警戒すべきで、「信頼してはいけない」のではないかと。しかし、そういう場合は、「軽軽しく信用してはいけない」となるのである。信頼では、常々その言動が信用できていて、そのうえに人物の信頼にいたっているのである。信じることに抜かりがあったわけではない。裏切られたのは、信じる者の不注意・判断ミスではない。信用できる者をさらに評価して敬意をもって、信頼するのであり、この態度は、交わりにおける大切な良い態度である。信頼していたのを裏切られたときは、信頼のその尊敬や謙譲の態度はいいことなので、それはそれとして信頼の態度にはきずをつけないようにとっておいて、「信用したのが間違いだ」というにとどめるのであろう。

（**「信念」自体は、常によいもの**）信念をもつことも、それ自体は、つねに、善となろう。節制とか情熱と同レベルの、周囲とは直接かかわりのない、自身についての善である。くじけそうになるとき、信念をしっかりもって進んでいくのは、大切な姿勢である。「悪い信

念」は、ない。そう評価されるような、よくない信念は、信念とはいわず、「頑固」とか、「執念」「執着」といわれるものになる。

ただし、親切や誠実､信頼と異なり､かならずしも、他者や周囲を思ってよいことをしようとの利他的な気遣いをするものではない。周囲にとっては、悪として結果することが生じる。まちがった信念とみなされるものが自分の信念に対立しているとすると、自分のは、相手からは、やはり、まちがった信念といわれることになろう。しかし、間違っている内容であっても、理性的に原理・原則に生きようとするその態度自体は、肯定的に評価しているから、「信念」というのであり、そうでないなら「執着」「思い込み」と否定的な表現をする。その心がまえは、純粋で評価できるので「信念」として肯定しつつ、その内容が間違っていたり周囲には害悪をもたらすので、「愚かしい信念に取り憑かれている」と残念がるのであろう。

平成 16 年 6 月

『HABITUS』（西日本応用倫理学研究会）通巻 10 号　1~17 頁